

# 法華寺阿弥陀浄土院推定地の調査

～浄土世界を再現した、  
水上に浮かぶ華麗な伽藍跡～

平城宮第312次調査 現地説明会資料

2000年4月15日

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

## (1) 調査の概要

調査地は、平城京左京二条二坊十坪（現・奈良市法華寺町）の南半部に位置する（図1）。この坪は、法華寺の寺域の南西隅に当たり、761（天平宝字5）年に光明皇太后の一周忌の齋会が行われたと文献に見える阿弥陀浄土院（⇒キーワード）の存在が推定されてきた。本調査区の北西側には大きな立石があることから、従来より園池の存在が想定されてきたが、これまで行われた坪内北半部の調査では、奈良時代や中世の建物、塀などを検出したものの、池に関わる遺構は確認されていなかった。

今回の調査では、坪南半部のほぼ中央に、細長い3本の調査区を設定した（図2）。南北に長い調査区を東区（5×35m）、東西に長いもののうち、北側を北西区、南側を南西区（いずれも3×30m）と呼ぶことにする。調査面積は355㎡。調査は2月28日より開始し、現在も継続中である。

## (2) 検出遺構

調査の結果、阿弥陀浄土院に伴うと見られる奈良時代の園池跡を検出した（図3）。また、この池の中から、埋甕および甕の抜き取り穴各1基と礎石落とし込み穴群3ヶ所を、池南東側の陸地部分から掘立柱建物1棟を検出した。以下、これらの状況を順に説明する。

①池 いずれの調査区でも確認された。特に、北西区は全体が池の中である。今回の調査では、池の東岸および南東岸を検出したが、それ以外の岸は調査範囲外にのびる。池の最大長は、確認されただけでも45m以上、北西側の立石付近までのびるとすれば、60m近くに達し、平城宮東院庭園の池の規模に匹敵する。

池の各部の状況について述べる。池岸は、長さ60～80cmの大きな石を横にして並べる。ところが、中には、景石として立っていた石が、明らかに倒れこんだような状況を示すものもある。現在、石がない部分にも、石を抜き取った穴が存在することから、本来は池岸全体に護岸用の列石があったものと考えられる。

池岸は、複雑に出入りし、東区のやや北寄り、池岸に挟まれて西に延びる岬がある。また、西区中央の陸地部分は、東西を池に挟まれ、池中に設けられた中島になるものと見られる。

池底には、30～50cm程度の、岸に用いられているものよりやや小振りの石が、平坦な面を

上向きに揃えて一面に敷かれている。なお、池底の石敷の上には、木屑を大量に含んだ暗茶色の粘質土が堆積しており、この中から多量の遺物が出土した。

②埋甕 北西区東半南辺の池底に当たる部分で、地山を掘りこんで埋められた須恵器の大甕の下半部を検出した。確認できたのは北半分で、残りの半分は調査区外に続く。甕の径は約1mで据え付け掘形の径は約1.2m。すぐ東側に、この据え付け掘形とほぼ同大の土坑が隣接して存在し、同様の埋甕を抜き取った痕跡と考えられる。これらは、土層から見て池と併存したものと見られる。中に、水生植物（蓮など）を植えていた可能性もあり、現在、分析中である。

③礎石落とし込み穴群 今回検出した礎石落とし込み穴は、阿弥陀浄土院廃絶後、整地に伴って礎石を廃棄した土坑である。出土した土器や瓦から、中世に掘られたことが分かる。

礎石落とし込み穴は、北西区西半、北西区東半、南西区西辺の3ヶ所でまとまって検出された。以下、この順に、礎石落とし込み穴群1、2、3とよぶ。これらはいずれも調査区の北、南端に沿った形で検出されている。大きさは1辺1.5～2m程度である。落とし込まれた石は、礎石そのものと見られる1～1.5m程度のものから、根石と見られる小振りなものまであり、中には、出ほぞが付く礎石も見られる。

礎石落とし込み穴群1は、東西方向8基、南北方向2基の計16基の穴が筋をそろえて並ぶ。東西方向は約2.7m（9尺）のほぼ等間隔、南北方向の間隔も約2.55m（8.5尺）でそろうので、これらの落とし込み穴は、元の礎石位置とほとんど変わらない位置に掘られているものと見られ、この位置に、礎石を使った建造物が存在した事は間違いない。また、調査区北西隅の1基と、南端に沿った列の穴の下層には、掘立柱の柱穴が確認されており、ほぼ同じ場所で、掘立柱から礎石建ちへの建て替えがあったことが確認された。

礎石落とし込み穴群2は、埋甕と埋甕抜き取り穴を挟んで、礎石落とし込み穴群1の延長上に、東西方向4基、南北方向2基の計8基の穴が筋をそろえて並ぶ。ただし、穴の間隔は若干狭く約2.4m（8尺）程度である。こうした状況から、礎石落とし込み穴群2も、ほぼ同じ位置に礎石を使った建造物があった痕跡と見なすことができる。また、礎石落とし込み穴群3も、礎石落とし込み穴列1の南列の南約15.5m（51.5尺）の位置にあり、礎石落とし込み穴群1の西から2、3番目の穴と南北の筋をそろえて4基の穴が東西2.7m（9尺）、南北2.55m（8.5尺）の間隔で並ぶ。こうした状況から、これらもほぼ同じ位置に礎石建物があつた痕跡と見なせる。すなわち、これら3群は、いずれも柱筋をそろえた一連の礎石建造物の痕跡である。

礎石落とし込み穴群2、3の周囲においては、礎石落とし込み穴の部分以外は全面に池底の石敷が存在するが、礎石落とし込み穴群1だけは、東端の1間分をのぞいて池底の石敷が全く存在しない。加えて、礎石落とし込み穴群1には、特に大きな1.5m程度の礎石や、出ほぞが付くものも見られることを考え合わせると、この場所に、池の中に建つ礎石建物があつた可能性が高い。そして、柱筋、柱間の関係から見て、礎石落とし込み穴群2、3は、礎石建物にとりつく橋か廊の可能性もある。

④掘立柱建物 東区南辺の池岸から1段あがった陸地部分に建てられた掘立柱建物。梁間2間、桁行2間以上の東西棟身舎の西妻部分に当たり、さらに東側にのびる。妻柱には柱根が残存する。柱間は9尺（約2.7m）等間。南側の小穴列は庇の可能性もあり、その場合の庇の出は12尺（約3.6m）となる。

### (3) 出土遺物

池底に堆積した暗茶色粘質土中より、多量の遺物が出土した。主なものは次の通り。

#### ①金属製品

- ・金銅製垂木先金具 1点——縦 11.4cm × 横 11.3cm のほぼ正方形。精緻な宝相華文を透かし彫りで表現し、表には鍍金を施す(右頁)。
- ・金銅製唄(ハ)金具(釘隠しの金具) 2点
  - a、径 6.3cm、高さ 2.5cm の半球形の縁に六花形の座を付ける。裏に長さ 2.4cm の鋳足を 3本 鋳出している(右頁)。
  - b、径 5.2cm、厚さ 0.6cm の薄い半円形で、裏に長さ 3.6cm の鋳足が 3本 付いている。
- ・金銅製軸端金具 1点——長さ 2.7cm、径 2.0cm の、一端が閉じた円筒形の鋳造品。軸端に付けるキャップ状の飾り金具であろう。正倉院文書に見える「金銅金塗」の軸の金具の類品に相当しよう。
- ・銅銭(萬年通寶。760(天平宝字4)年初鑄) 1点。

②瓦磚類 墨書瓦(「施米賀…」) 1点、緑釉瓦 2点、文様磚 1点、その他多数。

③土器類 二彩陶器片 1点、墨書土器 3点、墨画土器 1点をはじめ、その他多数。

④木製品 木製紡錘車? 1点、曲物底板数点、檜皮(多量)、をはじめ、その他多数。

⑤木簡 池底の堆積土から 1点 出土。上下両端を欠き、「河国遠江口(国カ)」の 5文字が読みとれる。参河国と遠江国の国名を列記している(長さ 99mm、幅 19mm、厚さ 5mm)。

### (4) まとめ

今回の調査の成果を簡単にまとめておく。

① [立石の存在などから従来この地に存在が推定されてきた阿弥陀浄土院の園池遺構を今回初めて確認したこと。] 池は、岸に景石を配し、底に大ぶりの石を敷くもので、東院庭園の池に匹敵する大規模なものと考えられる。また、岬や中島の存在も確認した。

② [阿弥陀浄土院の前身建物の存在を示すと考えられる建物の存在を確認できたこと。] 阿弥陀浄土院に伴うと考えられる礎石建物の下層に、ほぼ位置をそろえた掘立柱建物を推定できることは、この地の阿弥陀浄土院以前の様相を考える重要な材料となる。阿弥陀浄土院の地には、光明皇后に関わる写経事業を行った機構(外嶋院?)があったと考えられている。嶋とは園池のことであり、光明皇后の一周忌齋会に間に合わせるべく短期間で建立された阿弥陀浄土院は、この地にもともとあった園池を利用して造営された可能性が高い。

③ [池の中に立つという極めて珍しい構造を持つ礎石建物が確認されたこと。] これにとりつく橋または廊もまた、池の中に立つ。この礎石建物は、礎石の規模などからみて、堂舎であることは間違いなく、極めて精巧な作りの金銅製の飾り金具も出土したことから、池に浮かぶ絢爛な堂舎と、それをつなぐ廊または橋が園池と一体になった華麗な伽藍の姿が推定される。

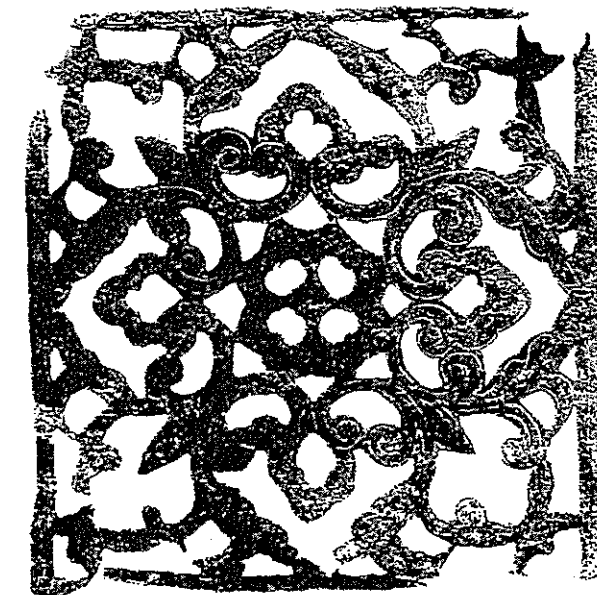
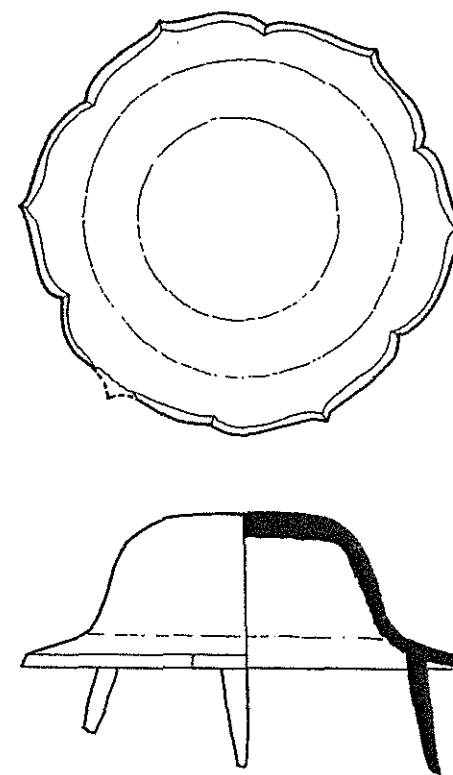
これは、浄土変相(⇒キーワード)の中に見られる極楽浄土の世界を3次元的に具現したものと考えられる。浄土信仰(⇒キーワード)を実現するための庭園という意味では、後の浄土庭園(⇒キーワード)と共通した思想背景を持ち、その最古の例と位置づけることができよう。

ただし、阿弥陀浄土院は平安時代の浄土庭園と比べて際立つ特徴を持つ。一つは、浄土信仰

の質の違いを反映して、故人の追善を目的とした庭園であることであり、もう一つは、その構造が大きく異なることである。平安時代以降の浄土庭園は、いずれも堂舎が池の前に面した陸地に建つという特徴を持つが、今回検出した堂舎は、水中に建つという点で極めて特異な構造を持つ。一方、中国敦煌の壁画などの浄土変相図に現された浄土の様相を見ると、建物や露台はいずれも池の中に建っており、今回検出した堂舎と共通する。すなわち、阿弥陀浄土院は、浄土変相に描かれた、八功德水を湛えた荘厳な極楽浄土の世界を、より忠実に再現したものと見なすことができよう。

また、これまでに確認されている奈良時代の庭園遺構は、いずれも庭遊びのための、邸宅や宮殿に付属した住宅・離宮系庭園であった。これに対し、今回検出した阿弥陀浄土院の庭園遺構は、仏教思想を実現するための仏堂系庭園と位置づけることができ、これまで類例のなかった貴重な発見といえることができる。

住宅・離宮系庭園の代表として、阿弥陀浄土院のすぐ西に隣接する平城宮東院庭園を取り上げて比較してみると、東院庭園の中央建物は、棧敷の部分のみ池の中に立ち、今回確認した水上に建つ建造物は構造が全く異なる。池の意匠の上でも、阿弥陀浄土院の園池が岸辺に景石を立て並べるのに対して、東院庭園では、池岸の大部分が砂浜を表現した州浜とされるなど、明らかに異なる特徴を持つ。阿弥陀浄土院の堂舎が、豪華な金銅製飾り金具と、出ほぞを作り出す大きな礎石を持つことと比べると、東院庭園の建物は、面取り角柱を多用するなど住宅系建築であり、阿弥陀浄土院の堂舎がこれより格段に豪華絢爛に荘厳されていたことは疑いない。



上：垂木先金具  
左：釘隠し金具(唄金具)

今回出土した金銅製飾り金具(縮尺2/3)

### 法華寺阿弥陀浄土院関連略年表

( ) は出典を示す

- 716年(霊龜2) 光明子、首皇子(後の聖武天皇)の妃となる(続日本紀)。父藤原不比等の邸宅(現在の法華寺の地)の一面に居所を設けここに住まう(続日本紀、東大寺献物帳)。
- 729年(天平1) 8月10日 聖武天皇の夫人光明子、聖武天皇の皇后となる。旧長屋王邸(平城京左京三条二坊一・二・七・八坪)に皇后宮を設ける(二条大路木簡)。
- 745年(天平17) 5月11日 平城遷都に伴い、旧不比等邸にあった光明皇后の旧宅を宮寺(後の法華寺)とし、旧長屋王邸の皇后宮を廃する(続日本紀、二条大路木簡)。
- 755年(天平勝宝7) (法華寺)外嶋院において、光明皇后発願の一切経である五月一日経の勘経(校訂作業)を実施(五月一日経、正倉院文書)。
- 759年(天平宝字3) 夏頃 法華寺金堂の造営を開始(正倉院文書)。
- 760年(天平宝字4) 2月10日 光明皇太后が一切経(坤宮官一切経)の書写を開始。皇太后の病氣と関係するか(正倉院文書)。  
2月16日 造東大寺司主典で当時法華寺の造営を担当していた安都雄足が、明日(17日)卯の時に一切経目録を法華寺西南隅に持参するよう、造東大寺司写経所案主の上馬養に手紙を送る。坤宮官一切経に関わるか(正倉院文書)。  
3月13日 光明皇太后の病氣平癒を祈って、諸神の祭祀を指令(続日本紀)。  
閏4月28日 光明皇太后の病氣により、五大寺(大安・薬師・元興・興福・東大の諸寺か)に雑薬二櫃・蜜一缶を施入(続日本紀)。  
6月7日 光明皇太后死去(続日本紀)。直ちに七七忌日の齋会のために、称讃浄土經1400巻の書写を開始。これに伴い坤宮官一切経の書写は中断し、事実上打ち切り(正倉院文書)。また、諸国には、同じく七七忌日の齋会用に阿弥陀浄土画像を描かせ、僧尼全てに称讃浄土經を書写させる(続日本紀)。さらに、一周忌の齋会のために、法華寺西南隅の左京二条二坊十坪に、阿弥陀浄土院の造営を開始し、安置すべき阿弥陀三尊像と25体の脇侍菩薩像を造らせる(続日本紀、法華滅罪寺縁起所引東大寺日記)。諸国にも国分尼寺に安置すべき丈六阿弥陀仏像と脇侍の菩薩像(観音・勢至か)を造らせる(続日本紀)。  
6月28日 光明皇太后を佐保山に埋葬(続日本紀)。  
7月26日 光明皇太后の七七忌日の齋会を東大寺と京内の全ての寺で実施。諸国では、国分寺において阿弥陀浄土画像と称讃浄土經の礼拝・供養(続日本紀)。七七忌日齋会終了後、一周忌齋会に向けて一切経(忌日御齋会一切経)の書写を造東大寺司写経所で開始(目標巻数は5271巻)(正倉院文書)。  
12月12日 太皇太后(宮子)と光明皇太后の墓を山陵と称し、忌日を国忌として扱うこととする(続日本紀)。  
12月30日頃 この頃までに法華寺金堂が完成し、最終決算報告書が作成される(正倉院文書)。
- 761年(天平宝字5) 5月10日頃 忌日御齋会一切経の書写事業が終了(正倉院文書)。  
6月6日頃か 忌日御齋会一切経5330巻を、24の漆塗りの轆轤に収めて、荘重な行列を組んで法華寺阿弥陀浄土院に搬入(正倉院文書)。  
6月7日 法華寺内西南隅の阿弥陀浄土院において光明皇太后の一周忌の齋会を挙る。諸国では国分尼寺において阿弥陀三尊像の礼拝・供養を実施か(続日本紀)。  
6月8日 今後光明皇太后の毎年の忌日には、山階寺(興福寺)において梵網經講読を行い、法華寺(阿弥陀)浄土院において忌日から七日間、僧十人呼んで阿弥陀仏を礼拝させることとする。これらの費用に充てるために、平城京の南の田冊町を山階寺に、また同じく十町を法華寺に施入(続日本紀、類聚三代格)。  
10月8日 恵美押勝(藤原仲麻呂)、聖武太上天皇のための補陀落山浄土図、光明皇太后のための阿弥陀浄土図の刺繍図像を造り、興福寺東院東堂に安置(興福寺流記所引延暦記)。
- 1304年(嘉元2) 法華寺阿弥陀浄土院は見る影もなく、本尊の阿弥陀三尊像と25体の脇侍菩薩像は全て法華寺講堂に安置されている(法華滅罪寺縁起所引東大寺日記)。

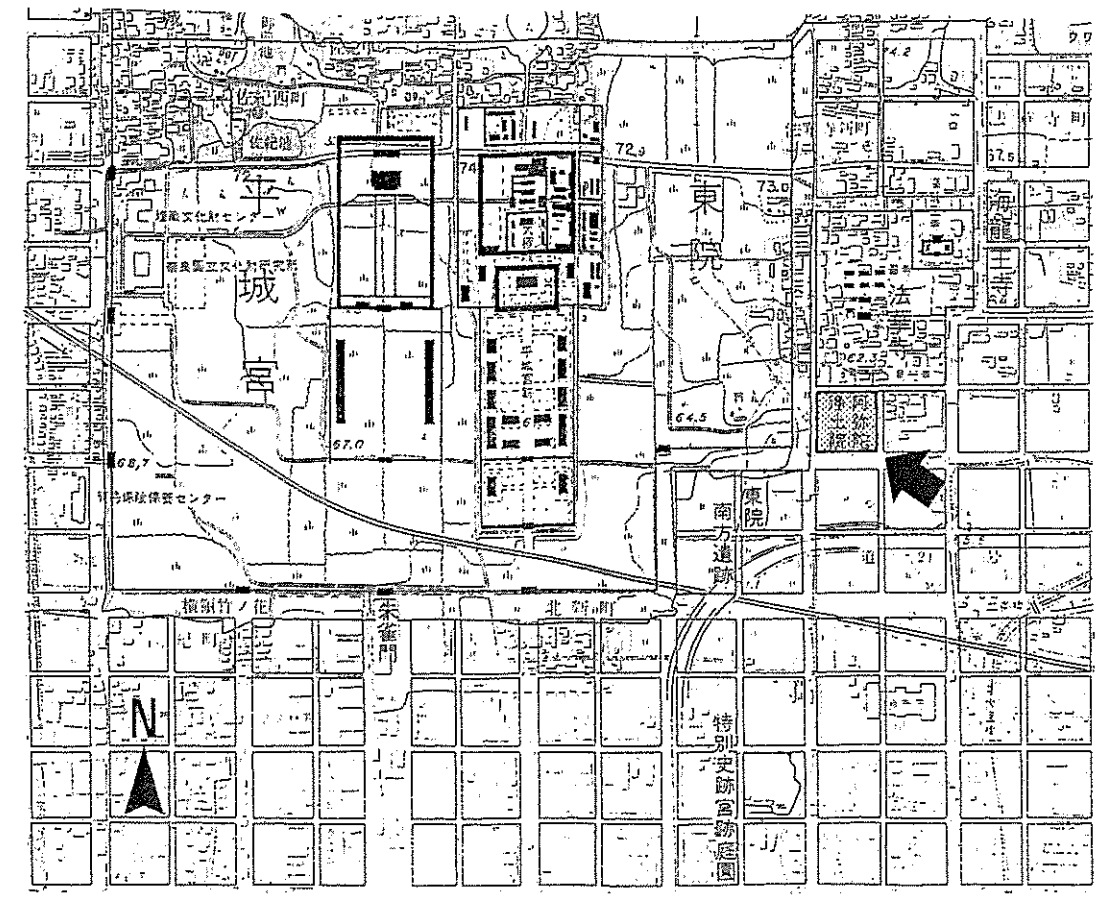


図1 阿弥陀浄土院の位置

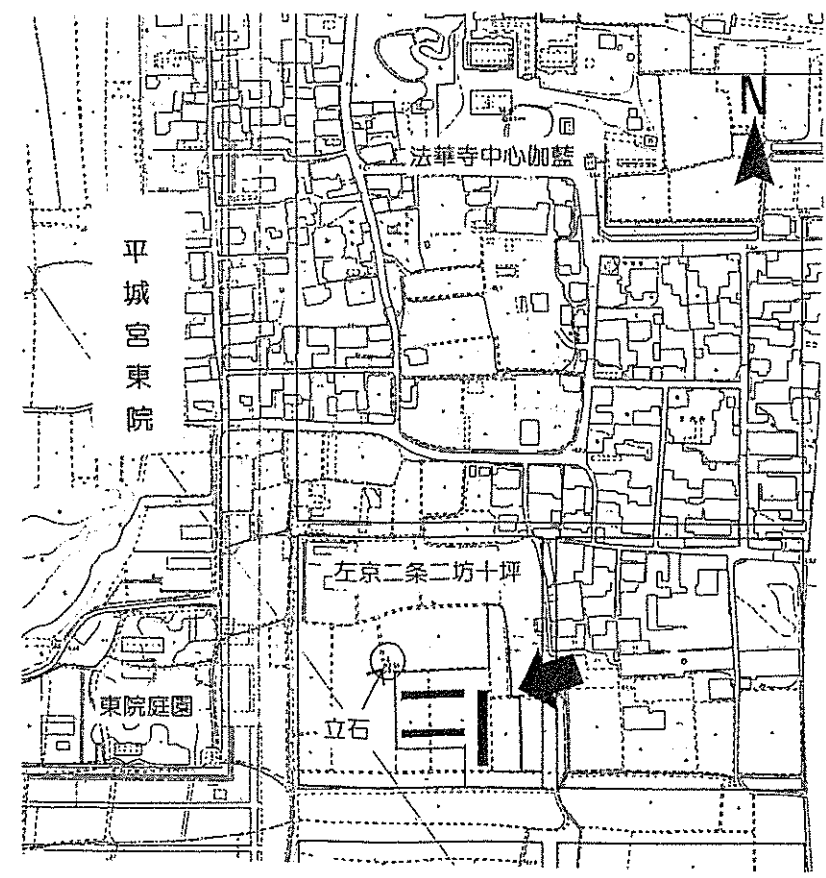


図2 調査区の位置



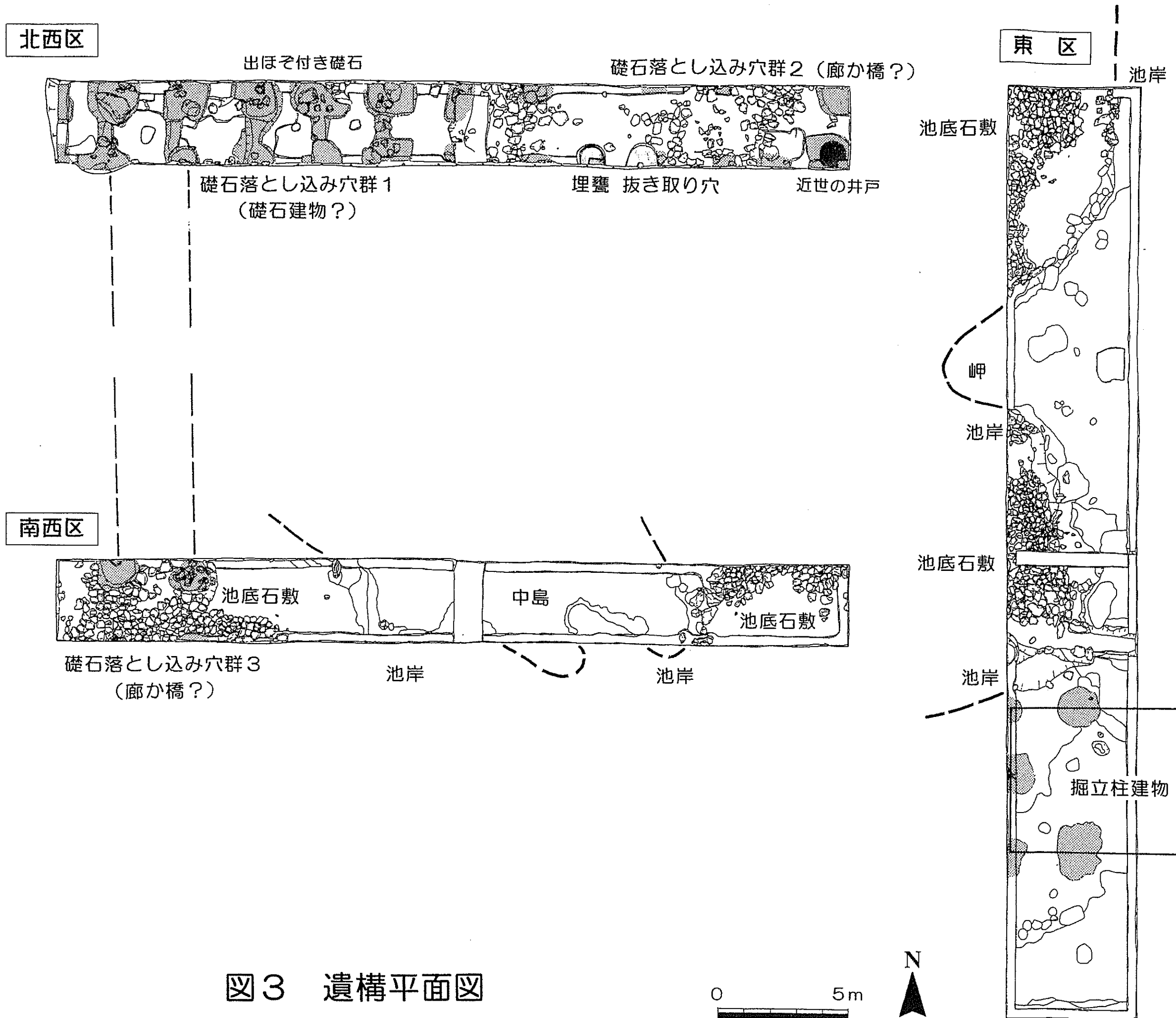


図3 遺構平面図

# 阿彌陀淨土院を理解するためのキーワード

## (1) 阿彌陀淨土院とは (年表参照)

760年(天平宝字4)6月7日に死去した光明皇太後の追善のために、法華寺西南隅に建立された法華寺の子院。761年(天平宝字5)6月7日に挙行された光明皇太後の一周忌齋会の会場となった。本尊は阿彌陀三尊像で、これを囲んで25体の脇侍菩薩の群像が安置されていた。約1年間という短期間での造営を主導したのは、皇太後の娘の孝謙天皇と甥の恵美押勝(藤原仲麻呂)であろう。皇太後の追善は、七七忌日のための阿彌陀淨土画像の作成と称讃淨土經の書写、一周忌のための阿彌陀淨土院造営と忌日御齋会一切經の書写という二段階で行われ、一周忌以後も忌日から一週間の供養が毎年行われた。

## (2) 日本の淨土信仰

淨土とは、仏の世界のことである。日本の淨土信仰は七世紀の推古朝頃大陸から伝来した。弥勒淨土の信仰と阿彌陀淨土の信仰の両者があったが、奈良時代には次第に阿彌陀淨土信仰が優勢になる。奈良時代の阿彌陀淨土信仰は、自己の往生のためではなく故人の往生を願うためのもの、つまり追善を目的として発達した信仰である点に特徴がある。平安時代にみられる自己の極樂往生を願って念仏を唱えるタイプの阿彌陀淨土信仰は、直接には九世紀以降に円仁や源信らによって興隆した天台宗の淨土信仰に淵源をもつ。

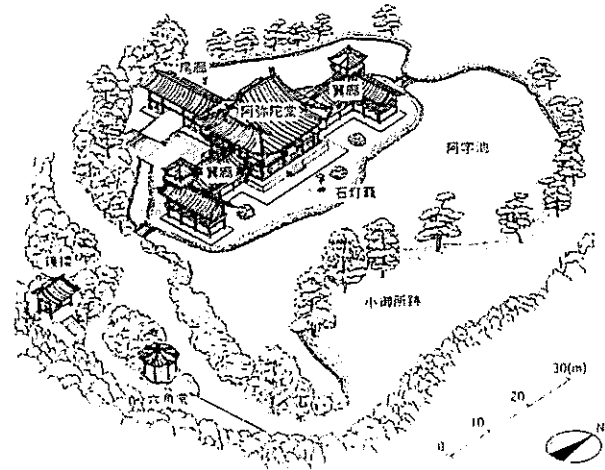
## (3) 淨土変相とは

諸仏・菩薩の淨土の有様を描いた絵画や浮彫、中国の隋、唐代に盛んに作成。日本では、中宮寺の「天寿国曼陀羅繡帳」に始まり、奈良時代には淨土信仰の盛行から数多く作られた。

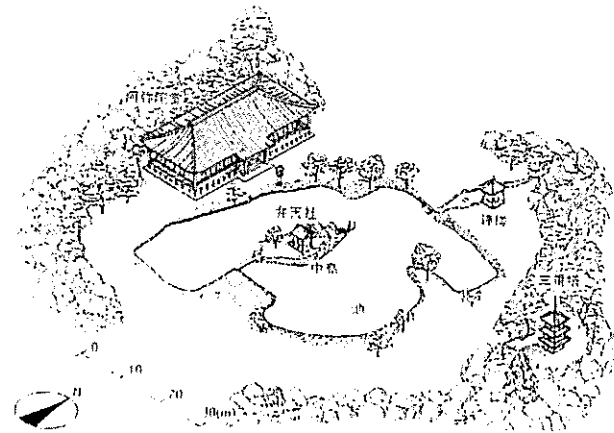
八功德水(はらくどくすい; 極樂の仏・菩薩が沐浴するための水。8種の功德を備える)を湛え、七宝の蓮華を生ずるといふ經典に描かれた仏の世界を2次的に視覚化したもので、淨土庭園は、これをさらに3次的に具現したものとされている。

## (4) 淨土庭園とは

淨土変相に描かれた極樂淨土世界を具現するために造られた庭園。術語としては比較的新しく、昭和10年代後半の造語である。淨土教の思想や信仰が、建築と一体となって庭園に表現されたもので、金堂や阿彌陀堂の前面に池を設ける。極樂世界は西方にあるとの考え方から、仏堂を池に東面させるのが原則であるが、地形や流水の都合で南向きにする場合もある。



平等院庭園 (京都府宇治市 1053年)



浄瑠璃寺庭園 (京都府相楽郡加茂町 1150年)

宮元健次1998『図説 日本庭園の見方』学芸出版社より

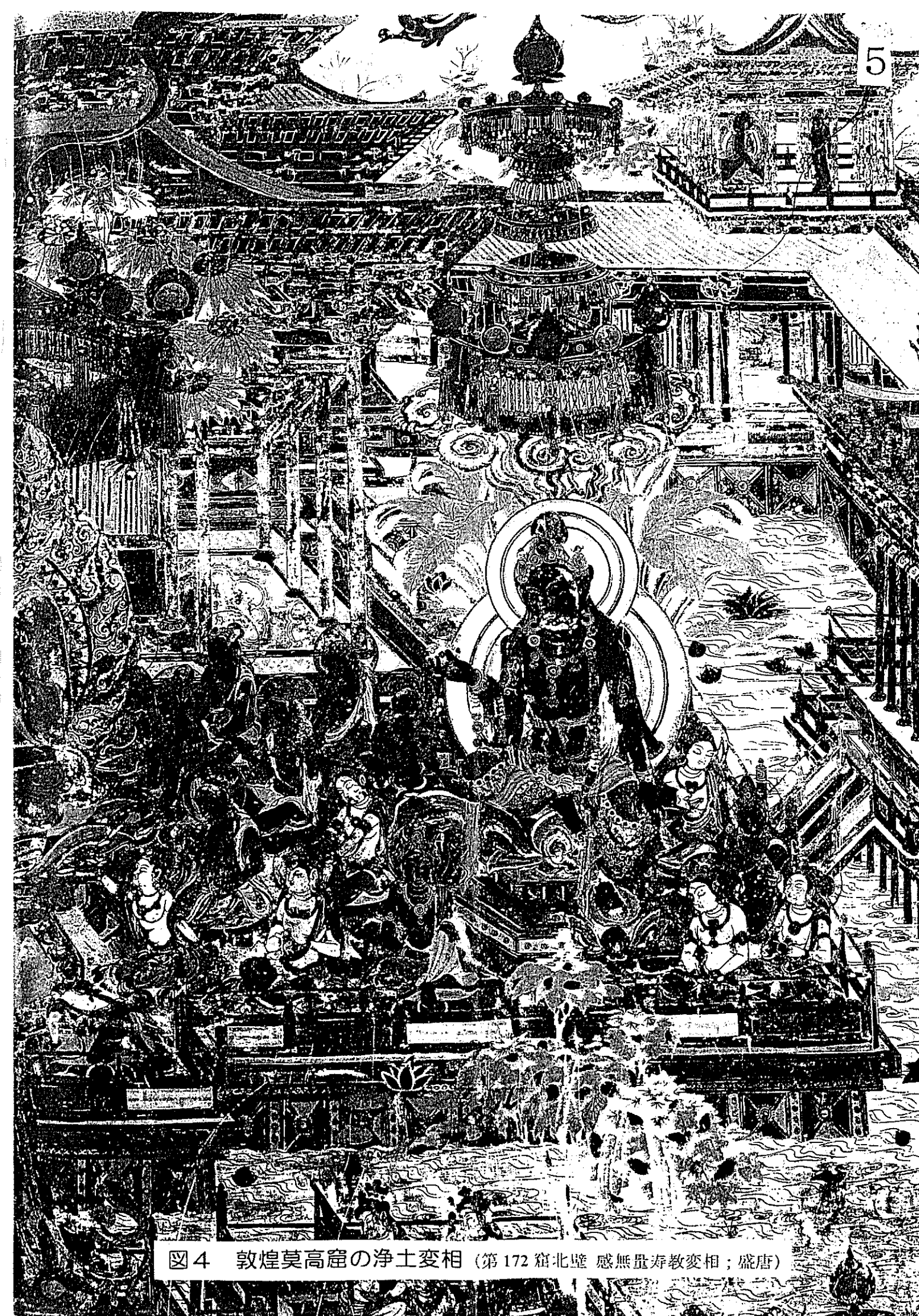


図4 敦煌莫高窟の淨土変相 (第172窟北壁 感無量壽教變相; 盛唐)